

『北支物情』・『従軍五十日』の同時代評価

——岸田國士の昭和一〇年代を考えるために

松本和也

大陸の秋の憂ひのひろきかな 岸田國士¹

一 問題関心

岸田國士、ことその昭和一〇年代の活動に注目した場合、大政翼賛会文化部長（昭和一五年一〇月～昭和一七年二月）を務めたという事実に突き当たると、昭和二二年には、その職を理由の一つとして公職追放指定（昭和二六年七月、解除）を受けるのだが、先行研究においてもその位置／意味づけはゆれて²いる。ただし、本稿の問題関心は、その位置／意味づけを再審に付すことにはなく、当時、岸田國士がどのように目される文学者だったかを探ることにある。というのも、個別具体的な人間関係が関わったことは疑い得ないにせよ、³同時代の岸田評価もまた、岸田をして大政翼賛会文化部長職へと導いた一因と考えられるからだ。

こうした問題関心から、本稿では日中戦争開戦後に書かれた従軍報告『北支物情』・『従軍五十日』を検討対象とする。後者は、

『現代日本の戦争文学』（六興商会出版部、昭一八）の板垣直子によって、次のように紹介される特異なものであった。

岸田國士は他の人達のやうに、単に戦跡を廻つて歩いたり戦況を報道することだけに満足しなかつた。大陸に渡つた機会に、支那そのものについて、即ち、都市の状態、風俗、習慣、及び文化的建造物や施設についてまで探らうとしてゐる。のみならず、短い逗留期間内に、彼地の知識階級に接触して、彼等の意見を知らうと努めた。（四二頁）

おそらく、こうした二著の書き手であったことが、岸田を大政翼賛会文化部長職へと近づけていく。右に示した見通しの傍証として、無署名「異彩を放つ両部長 岸田國士氏と武内文彬氏」（『朝日新聞』昭一五・一〇・二〇）を引いておく。

大政翼賛会はその文化部長を文壇から簡拔した、流石は後藤隆之助の眼力だとの評判は文壇にも出てゐる。／正直にいつて今の文壇から大政翼賛会に人を送るとすればその人物識

見において岸田國士氏を措いて他に適任者は尠い。／氏は中々頑固だが、温厚篤実な紳士で、それにこの愛国文学者には視野の狭さのない点が、「従軍五十日」のやうな傑作を生んだ所以でもあり、且つ又その言説が一般から信頼される理由でもあらう。／日露役に野戦砲兵第三聯隊大隊長として活躍した父を持つ岸田氏は、名古屋幼年学校から陸士に進んだが、不幸病を得て退学した陸軍少尉。（略）事務的手腕は明大文科部長として試験済みだが、加ふるに彼生来の強烈な責任観念と、その血脈中にひそむ武人的意志力の活動を、此秋に際して特に期待したのである。（一面）

ここには『従軍五十日』への論及がみられる他、岸田國士の《人物識見》、軍人の家系ゆえの《武人的意志力》など、本稿で後述する『北支物情』・『従軍五十日』評価と重なるポイントが、大政翼賛会文化部長としての《適任者》たる理由とされている。

これまでの、『北支物情』・『従軍五十日』に関する研究では、断片的な論及が積み重ねられてきた。『北支物情』については、今村忠純が《出色であり、かつ異色でさえある》と評し、都筑久義は《中国と中国人を理解しようとしたルポルタージュ》⁵⁾とその特異性を指摘している。『従軍五十日』については渡邊一民が《すべての戦争文学が禁域としたところまであえて踏みこんで、日中戦争そのものについて徹底的に考察しようとする》と高く評価する一方、《韜晦もごまかしもないところに特徴》をみる荒井とみよは、岸田の《戦場に最後まで適応できなかった痛ましき》⁷⁾を指摘し、大笹吉雄は《岸田の「批評」》⁸⁾を《目》⁸⁾を読みとつていゝ。五味渕典嗣は《日本軍占領地での「文化工作」の惨めさに多

くの紙幅を費やした》ものの、《長期戦に向けた覚悟と新秩序建設の困難に立ち向かうという枠組みから大きく逸脱しているわけではない》⁹⁾と同作を位置づけた。ただし、一連の先行研究には、同時代の読まれ方・評価への目配りが欠けている。

そこで本稿では、人気・実力をあわせもった新聞小説作家として評価の高まる昭和初年代以降の評価を整理した上で、『北支物情』・『従軍五十日』ならびにその書き手である岸田國士への同時代評価を調査・分析することで、昭和一〇年代における岸田國士（の位置）を再考する足場を築くことを目指す。

二 長編小説作家としての岸田國士

『北支物情』・『従軍五十日』刊行に前後して、岸田國士を主題とした作家論が相次いで発表される。その大半が、岸田の長編小説を論じたもので、そこに岸田への評価も浮上してくる。

まず、論及対象となる時期の長編小説を確認しておくとして、『由利旗江』（『東京朝日新聞』昭四・九・七〜昭五・一・二六）、『鞭を鳴らす女』（『時事新報』昭六・一・一三〜昭七・三・一七）、『愛翼千里』（『オール読物』昭八・一〇〜昭九・四）、『都会化粧』（『名古屋新聞』昭一〇・七・八〜同二・一五）、『双面神』（『東京日日新聞・大阪毎日新聞』昭一一・五・一九〜同二〇・五）、『落葉日記』（『婦人公論』昭一一・六〜昭二二・五）、『牝豹』（『河北新報・福岡日日新聞・北海タイムス・新愛知』昭一二・一・二三〜同七・三〇他）、『幸福の森』（『都新聞』昭一二・七・一九〜同二一・五）、『暖流』（『東京朝日新聞・大阪朝日新聞』昭二二・四・

一九一〇同九・一九一、となる。

『双面神』刊行後には、河上徹太郎が「岸田國士氏「双面神」(『文学界』昭一三・三)を書き、『この作品に現れてゐる作者の表情は、ともあれ道德家の表情だ』と看破し、作中人物を『尽く作者の頭の中にある或る思想の分身』(二五九頁)だと見立てた上で、次のように論評している。

此の小説は現代に關する色々な問題を含んでゐる。殊に現代でモロクの神に比すべき軍人を拉し來つて、之に文化人としての色づけをし、不十分乍ら日常生活者として描いたなど、作者の意図はよく汲まれるのである。千種といふ女主人公にしても、日本的インテリ女性の美で之を飾らうとして十分分力が尽されてゐる。(二六〇頁)

軍人や女性をモチーフに、『現代』というテーマに取り組んだ作品として『双面神』は読まれているが、『双面』というモチーフは戦時下の岸田(の言動)を語る鍵語でもあった。

『氏が純日本人的な無為感の上に西欧の教養をつみかさねた作家であることを明かにしてゐる』作品として『牝豹』を読む無署名「岸田國士 牝豹」(『文芸』昭一三・三)では、『氏自身の人間的な苦惱などはほとんど影をみせず、ただあるのは、有ゆるものを相対的に眺め得る鋭いそして一種常識的な理解力の美事な配列だけ』(二七四頁)と、徹底した岸田のスタンスが見出されている。『岸田國士氏の長編小説は幾つか読んでゐるが、概して面白かつたやうに記憶してゐる』という「長篇小説評(3)嘘の力の有無」(『東京朝日新聞』昭一三・四・一四)の正宗白鳥は『氏の作品の何処かに私の好みになつた所がある』として、『落葉

日記も面白かつた。今度の「牝豹」は、氏としては楽々と書かれたものらしい』(七面)と好意的に評している。つづく「長篇小説評(4)傍観的人生観賞」(『東京朝日新聞』昭一三・四・二五)には、『岸田氏は石坂氏や川端氏よりも、人生鑑賞が冷かであり傍観的』(七面)だとの分析もみられる。

この後、『牝豹』読了後に書かれた中島健蔵「岸田國士氏に就いて」(『文芸』昭一三・六)が発表される。『此の小説だけを読み落してゐたし、今朝日新聞に出てゐる『暖流』に少からず興味を持つてゐるので、『双面神』、『落葉日記』以後の氏の航跡を見失ひたくなかつた』という中島は、前後する岸田の長編小説を視野に入れて、『氏は三角波の真只中に居る』、『改めて氏の仕事を思ふと、航跡が極めて明か』だとその作家的な位置づけを示しながら、『ほとんど停船することなく、ステディーに進んでゆく、船足の軽くない船』(一八〇・一八一頁)とたとえている。さらに、中島は新作『暖流』にふれて次のような展望を示す。

我々は『双面神』を思ひ出し、広義のインテリゲンチヤの内
部闘争が展開されさうな『暖流』に眼を注ぐべきである。此
の船は見かけの軽快にも係らず、どつしりと荷を積んで三角
波を乗り切つて行く巨船だ。(一八三頁)

ここでは、困難な課題を引き受けつつそれを超克する岸田への期待が示されているが、『暖流』は発表当時から好評を博す。

『暖流』はなかなか面白い』という無署名「読んだものから」(『三田文学』昭一三・七)では、『まだ書き出して、結局批評は出来ぬが、「日疋」といふ男の性格、に興味を持たれる』とされ、さらに『或る破産に瀕した病院内に彼を持つてきて、その改革に

当らせるところ、さすがに岸田だと腕の凄さに目を見張られる(一九九頁)と、その《腕》が高く評価されている。杉山平助も「新聞小説の社会性」(『文芸春秋』昭一三・九)で、《私が完全に通読してゐるのは、朝日新聞の岸田國士の『暖流』だけ》だとして、《これは、とにかく中年者の我々にも、何かを教へたり、たのませたりするものがある》(一八〇頁)と述べている。そこに、K「公論私論」(『早稲田文学』昭一三・九)が「岸田國士が新聞は通俗小説のつもりで書いてゐると云つてゐるのは正直でよい》(二二頁)と指摘した一面もくわわる。

『由利旗江』を《主題の点でも人物の系譜といふ点でも、爾後の全作品の源泉をなす長篇》(三〇三頁)だと位置づけながら、岸田の長編小説を包括的に論じたのは、西村孝次「岸田國士論」(『文芸』昭一三・一〇)である。ここでは、岸田の長編小説における基底的な機構が、次のように析出される。

岸田氏は、他のいかなる特性にもまして、まづ人間批判のほげしい情熱、この国においてしばしば古武士の風格を帯びてあらはれるやうな情熱を底にひめた作家である。しかもかかるモラリスト的志操に加ふるに、深い西欧的教養ときびしい諷刺家的性格と、そして研ぎすました風俗時評家的感覚を氏はそなへてゐるのである。そこから、氏の作品に独特な澄みきつた知的雰囲気や、洗練された会話、人物の交渉などが生れる。(三〇七頁)

さらに、『双面神』を《はじめて文化人としての軍人が描かれたといふ点でもすぐれた特質をもつてゐる》と論じ、次のように長編小説群における軍人(論)の意義が説かれていく。

軍人は紀伊子の兄陸軍航空大尉澄田太郎右衛門として『鞭を鳴らす女』に登場してゐるし、『落葉日記』にも騎兵大尉があらはれるが、『双面神』において軍人論、といふより軍人の「孤獨な、悲壯な、宗教的姿勢」(北風の帝 一〇)を述べ、軍人にたいする高潔な信頼と、その信頼が現代日本において強ひられる一種の位置とを切々として海軍少佐鬼頭司令門に語る神谷仙太郎の言葉から、われわれは現代日本の文化の光榮と宿命とを聞くことができるであらう。(三二〇頁)

つづいて西村は、《これが別な角度をとるとき、岸田氏の戦地報告『北支物情』が生れる》とするが、それは岸田が《今日わが国において政治を批判しうる能力と気魄を有する少数の文学者のひとり》で、かつ《スキフトをはじめモラリスト作家と呼ばれる一群の精神におのづからつらなる面がある》からで、それゆえ《岸田國氏は、今後わが国の文学にとつて、ますます多くの可能性をはらむ作家のひとり》(三二二頁)だとして期待されるのだ。踵を接して発表された河上徹太郎「岸田國士論」(『改造』昭一三・一二)もまた、岸田の長編小説を包括的に論じた作家論である。《文学者としての岸田國士氏には、二つの面がある》という河上は、《一は「由利旗江」「双面神」の著者として》、《他は「にんじん」「ルナル日記」の訳者として》(二三四頁)と述べた上で、前者に注目していく。《氏は一言で評すればモラリストであり、その限りに於て理想主義者》だと断じる河上は、岸田の長編作品群に通底する主題を次のように探り当てていく。

氏はこゝ、数年の間に「由利旗江」「鞭を鳴らす女」「落葉日記」「牝豹」「幸福の森」「双面神」等の長篇を描き、そこで

一々現代文化人の重要な問題を捉へて主題としてゐるのだが、その主題を考へて見ると、現代文化が東西古今色色な要素の混入を以て錯雜し途に迷つてゐるその矛盾相剋を取扱つてゐるといへるのである。(二三・三五頁)

さらに、岸田の主題を《現代人は如何にして可能なるか》と換言し、《予め現代人が何等かの混血児であると前提してゐる所に、氏のモラル乃至モラル探求の特徴が現れてゐる》(二三・六頁)と論じ、近作『双面神』を《恐らく岸田氏の最大傑作》(二四〇頁)とみる。最後に、河上は《恐らく氏は第二の「双面神」たるべき幸福な恋愛小説が書きたいであらう》と述べ、それが《氏や氏の読者のみならず、氏の小説とは別に生活する一般現代人のすべてが最も欲してゐるもの》(二四一頁)になると推測している。

してみれば、長編小説作家としての岸田國士とは、ものごとを客観視する眼・筆致によつて、現代の課題に取り組むモラリストと目されてゐたのだ。それは、別言すれば、西欧の教養をもちつつ日本に軸足を置いて思索し得る文学者の謂いでもある。

三 『北支物情』の同時代受容

昭和一二年七月の日中開戦以降、戦場をモチーフとした文学者による報告文学への期待が一挙に高まる。そこで、各紙誌は文学者を特派員として戦場に送りこんでいくが、同年一〇月末、岸田國士は文芸春秋社の特派員として北支戦線に赴くことになる。この時、無署名「岸田國士氏も出発か」(『日本学芸新聞』昭一二・一〇・一〇)には、《われは氏の作家眼を通じてのルポルタ

ージュに多く期待したい》(二面)という言表がみられる。

現地報告の前段にあたる「北支旅行前記」(『文芸春秋』昭一二・一一)掲載時の「編輯後記」には、《本誌は岸田國士氏を北支那へ特派した。来月号から氏独自の境地になる通信が本誌を飾る筈である》(四六四頁)とあり、人選への自信が伺える。

『北支物情』(白水社、昭二三・五)の初出は以下の通り。

「北支旅行前記」(『文芸春秋』昭一二・一一)

「北支日本色」(『文芸春秋』昭一二・一二)

「北支日本色」(『文芸春秋』昭一三・一一)

「北支日本色」(『文芸春秋』昭一三・一二)

「北支物情誌」(『文芸春秋』事変第六増刊)昭一三・一二)

岸田國士の旅程は、《塘沽に上陸し、天津から飛行機で保定へ、それから貨物列車で石家莊まで行き、引つ返して北京へ、そこで二三日滞在して、陸路大連へ廻り、船で帰つて来た》というもので、《往復をいれて三週間といふ慌ただしい旅行》だったという。また、岸田國士・島木健作・芹澤光治良・深田久彌・舟橋聖一・阿部知二・林房雄・小林秀雄・河上徹太郎「座談会 支那を語る」(『文学界』昭一三・一一)において岸田は、北支戦線視察のねらいと概要を次のように語つてもいる。

北支那に居た日数と言へば僅か十日位のもんです。結局第一線の所謂戦闘といふものは見ないでしまつた。唯その間に日本軍が占領した歳などの治安工作、そこへ入込んで来て居る日本人、それがどんなことをして居るか云ふことを多少注

意して見た、それから北京では〔略〕手蔓を求め得られる範圍で知識階級と云ふやうな人に四五人会ひました。(一六六頁)

『北支物情』『旅行前記』を、「今度文芸春秋社が私に北支戦線を見学する機会を与へてくれたことを何よりもうれしく思ふ」と書き起こす岸田は、「むろん、作家として眼近に戦争現地の面貌を凝視し、そこに想像を絶した天地の呼吸を感じるであらう。その印象をなるべく具体的に細かくノートするつもり」だと基本方針を示す。さらに、「私は「日本人として」此の戦争に対する外はない」がゆえに、「どれほど「客観的」であらうとしても、それは恐らく無駄」(一九六頁)だという断りを付してもいる。

その上で、他の報告文学や『北支物情』の同時代受容を想定した時に注目される本文の特徴は、以下の三点である。

一つは、「軍人の家に生れ、自分も軍人として青年期を過し、今なほ在郷軍人としての覚悟」をもつ岸田による、「日本人の性能プラス軍人精神といふものが実戦に於てどんな力を發揮するかといふことを、いろんな面で観察してみたい」(一九七頁)という希望である。軍人への関心は、「最初に会った同期生」(二〇八・二一一頁)でのS・Yをはじめ、旧友との再会を通じて示され、そうした人間関係によつて視察の便宜も図られていく。

二つめは、「日本軍を迎へる支那民衆の表情」(一九八頁)への興味を通じて、岸田には支那という視座が準備される。たとえば「親日家」では、上海商人Fによる「支那にいろんな支那ある。支那人にいろんな支那人ある。いつしよにする、よくない」(一二二頁)といった言葉がそのまま報告される。さらに「天津――

北京」では、「支那を負かした日本が、将来、如何なる態度で、北支民衆の上へのぞむかといふ、そのこと自身が、彼等を永久の味方にするか敵にするかの分れ目だと思ふ」(三〇一頁)と思索をめぐらせもする。

さらに三つめとして、「所謂、「戦闘」そのものはつひに見ずじまひ」となった反面、「広義の「戦争」なるものを、いろいろな面でいろいろな距離から、そして、いろいろな現象のなかで、身を以て味ひ、幾分実感としての心の一隅に残し得た」(二〇〇頁)という、体験ではなく多角的検討という戦争へのアプローチがある。全編を通じて、岸田には文化工作など戦後(建設)への興味が顕著で、日本人・支那人に積極的にかい、話を聞き、その発言を書きつけながら、思索を展開していく。「座談会」で示されたように、「体験」と(思索のための)「材料」こそが、岸田にとつては今回の任務の主眼なのだ(三三一頁)。そうした岸田であれば、「北京を去る」で「政治的な意味ばかりでなく、私は、今度の旅行を契機として、支那及び支那人に対する興味が、非常な勢ひで頭をもたげて来た」と「告白」(三三九頁)するのも当然である。これこそ、「北支物情」の到達点であると同時に、読者へと思索を促す契機でもある。

総じて『北支物情』は、従軍記者岸田が、北支那を移動しながら目に映る情景を観察し、さまざまな人物に会つて話を聞き、思索をめぐらせた、複雑な現実そのままの報告である。ここでは短絡的な評価は排され、軍人とのコネクションや支那という視座が生かされた独自の立場からの思索が展開されていくのだ。

では、『北支物情』は発表当時どのように読まれたのだろうか。

《今月の雑誌に載つてゐる観戦記(?)》は「改造」の「上海雜感」(三好達治)と「文芸春秋」の「北支日本色」(岸田國士)と二つだけ読んだ」という「文芸時評」(三) 重厚性と軽妙さ(「信濃毎日新聞」昭一二・二二・一夕)の井伏鱒二は、《北支日本色》には、私の知りたいと思つてゐた占領後の風俗が紹介されてゐる》と述べ、その内実を《いづれこの事変が片づく」と、最早やかういふ風俗は見られさうにない過渡的状态が書いてある》(二面) こととみていた。室生犀星は「文芸時評」【3】心ある作家達(「読売新聞」昭二三・一・七夕)で《岸田國士の着きぶりも岸田國士らしい》(四面)と評しているし、船馬「大波小波 和かな雰囲氣」(『都新聞』昭一三・二・二二)には端的に《面白い》(一面)という評もみられる。無署名「六号雑誌」(『三田文学』昭一三・三)は、『北支物情』が《在来の日支事変ルポルタージュもの、もつ概念を完全に一掃してゐる》とした上で《血と砲煙の中にあつて、これほど良き意味に於ける、「冷静」を失はぬ「芸術家的」觀察眼は、他に絶無だ》(一九五頁)と称讚する。

以上から、岸田の独自性が好意的に評価されていたことは確認できるが、単行本刊行の際には、既述のポイントと重なる次の広告文「『北支物情』」(『文学界』昭一三・六)が出る。

嘗て軍人であつた著者が、今は部隊長で出征してゐる多くの同期生の好意を得て、戦地を最も効果的に視察した。茲にこの貴重な報告書を全国民に贈る。これは単なる戦地ニュースではない。硝煙の中に呼吸する大陸の物情である。これこそ支那を認識する新しい量だ。／政治家も軍人も、青年も老人も、男も女も、支那への新しい関心を本書に索めよ!

また、次の広告「岸田國士著『北支物情』」(『東京朝日新聞』昭一三・五・一四)には、より詳細な言及がみられる。

所謂「生々しい戦争のルポルタージュ」はニュース映画に如かず、砲煙と血潮の現地報告も新聞の報道より一步を出る事は困難である。然るに北支物情がニュース映画よりも生々しく(『新楽まで』参照) 新聞記事よりも遙かに如実である(『空の一騎打』参照) のは何故か。それは本書が単に支那事変の現地報告であるのみならず、一連の小品より成る一卷の素晴らしい長篇小説であり聊も事実を歪曲せずして而も鋭い觀察と峻烈な批判を盛つた叙事詩でもあるからだ。(『石家荘』「女学生の作文」『北京を去る』参照) (一面)

いづれも、『物情』や『叙事詩』といった把握によつて、同時に量産されていく報告文学との差異を前面に打ち出している。以下、単行本刊行後の同時代評を検討する。一連の報告文学の中で《読みたいと思つたものは岸田國士氏のもの》だという新居格は「支那行文士の収穫を見る」(2) 岸田國士氏の明るい眼(『都新聞』昭一三・五・一四)で、『客観主義の保持』・《穩かな態度》・《明るい眼》・《一種の好ましい文化的ニュアンス》といった報告主体に関する評価点をあげつつ、次のように論評している。われ／＼が戦地に赴いた文学者から聴きたいことは、彼等らしい言葉である。お座なりでもなく、付焼刃でもなく、主観的には正直そのまゝの発言であり、客観的には澄んだ眼に映すものの姿である。(一面)

つまりは、岸田による『北支物情』こそが文学者らしい報告文学だという絶賛評である。水原秋櫻子「文芸時評」(5) 二つの単

行本」(『東京日日新聞』昭二三・七・二夕)による《文章の旨さに敬服した》(五面)といった評も交えつつ、論点は報告主体たる文学者・岸田國士に集中していく。初出時に《愛読した》という「新著三つ／「北支物情」―岸田國士著」(『新潮』昭一三・七)の中村武羅夫も《いかにも文化人らしい、しづかに澄んだ眼と、知識人らしい見識を以て觀察したところを、淡淡として書いてゐる》と評した上で、他の文学者による報告文^{ルポルターージュ}字に比して《いかにも文学者の眼を以て見た現地報告》であるところが《特色》(一六五・一六六頁)だとする。阿部知二も「書評 岸田國士著『北支物情』」(『文学界』昭一三・七)で、「北支物情」を《ただの報告・記録でなく、岸田氏の人間味がにじみ出てゐる、「文学作品」(二八七頁)と捉え、次のように評している。

どういふ風に立派な文学であるか、といへば、これらの文章が、一見さりげなく書かれ、軽快な筆のやうにみえるが、その裏に、意志的なおちつきをみせた著者が居るのであり、書くべきを書き、感ずべきを感じ、さういふ風にして聡明に選り分けられたものを、大きな深い人間の精神のあたたかさで包んで、含蓄深くあらはしてゐる、といふべきであらう。(二二八頁)

こうして阿部も《著者》の存在を感じつつ、《岸田氏が、とらへて提供する各場面そのものが、はなはだ雄弁な表情を以て、私達にこの事変の諸相を語る》のだとする。「銃後リレー報告書 現地報告論」(『読売新聞』昭一三・九・一五夕)の新居格が、《素直な筆で書いた文士の現地報告としてわたしには岸田國士氏の「北支物情」が好ましく、さらに、火野葦平氏の「麦と兵隊」に

親しまれた》(二面)と述べて、「麦と兵隊」と『北支物情』を並置したのも、両作ともに書き手(の人間性)が高く評価されていたからである。¹⁵⁾また、丸岡明「三十八年度記」(『三田文学』昭一三・一二)には、《岸田國士氏の「北支物情」(単行本)や小林秀雄氏の「蘇州」(文芸春秋、六月号)など、従軍の報告文学として秀れたものであつた》(二〇〇頁)とあり、昭和一三年の収穫ともされた。

さらに、軍人という論点からの書評・杉山平助「岸田國士著『北支物情』」(『東京朝日新聞』昭一三・六・一三)も出た。《今度文学者で戦地へ行つた人は大勢あるが、誰が見ても最も適任だと思はれる人に岸田國士氏がある》という杉山は、岸田が《士官学校出身者》であることによつて、《戦地においてのそれ等(軍人の引用者注)の友人たちとの邂逅がこの書物の重要な興味の一つ》だと指摘し、《この著者こそ、さういふ方面(武的なるものと文化的なるものとの対立反撥)／引用者注)において一種のグリセリン的役割を果すのに適當な人物の一人だと思はれる》(四面)と評している。同様の論点への注目は、《流石高名であつただけに、この書の読後感には印象甚だ鮮明》・《ルポルターージュに一種の型を創始した》と『北支物情』を絶賛する無署名「読んだものから」(『三田文学』昭一五・六)にもみられ、《之(軍人としての姿勢／引用者注)に加ふるに詩人の眼》と、やはり報告主体が評価され、《思へば文芸春秋社としても頭のいい人選をやつたものである》(二三〇頁)という総括的な感想が洩らされる。

四 『従軍五十日』の同時代受容

《今日では一種の社会的名士になつてしまつた》(二二四頁)と岸田國士をとりあげる無署名「人物クローズアップ 岸田國士」(『新潮』昭一三・六)では、《今では劇作家としてよりも、新聞小説家として、また社会的名士として、同時に文壇に出て来た新感覚派の仲間よりも重々しい位置を持つてゐる》と評され、その上で次のような懸念が語られている。

だがそれとともに、これまで表面に出なかつた軍人型が表に現はれて来たことは気にかかる。先頃文芸春秋社の特派員として北支に行つた時の紀行文に、かつての同期生が今では重要な位置を持つ部隊長になつてゐるのを一々訪ね、ちやんと軍人らしい意見の交換をしてゐる。(二二六頁)

当時、岸田の軍人という側面は必ずしも否定的に捉えられたわけではないが、作家のキャリア、小説中の人物設定をこえて、『支物情』においては軍人時代の旧知の人々と再会や会話が報告されたことで、次第に強調され岸田像の一部を成していく。

『従軍五十日』(創元社、昭一四・五)は、同書「前記」によれば「昨年九月から十月にかけて、いはゆる「従軍作家」の一人として中支戦線のところどころを視察した結果、生れたもの」(六九頁)である。収録された現地報告の初出は以下の通り。

「従軍五十日」(『文芸春秋』昭一三・一一)

「従軍五十日」(『文芸春秋』昭一四・一)

「揚州の一日——従軍五十日——」(『文芸春秋』昭一四・二)
「従軍五十日 治安と建設——その一例——」

「我等は何を知るべきか——従軍五十日——」
(『文芸春秋』昭一四・三)

「私の従軍報告」(『東京朝日新聞』昭一三・一一・一二・一六)
(『文芸春秋』昭一四・四)

帰国後に催された座談会、岸田國士・中谷孝雄・深田久彌・山本実彦「ペン部隊は何を見たか」(『文芸』昭一四・一)では、山本実彦との間に次のようなやりとりがみられる。

山本 岸田さん、中支に行かれて、文化的の工作はどういふ所から手を着くべきかと考へられました？

岸田 僕は、やはり、学校だと思ひましたね。「略」支那人のための小学校を早く作り、日本から優秀な先生をどんどん送る必要です。日本人の経営する模範小学校が各県に一つづつ、できたら、大したものだ。それと同時に中学校も造らなくちやいけないと思ふですね。これは、十年後のインテリを養成する基礎です。すべての中等学校へ真つ先にいい日本語の教師を持つて行く。日本語を通じて、直接日本といふものを新しく認識させる以外に有効な道はないやうに思ひますね。(三四六頁)

このように、『従軍五十日』における興味を中心は文化工作にある。「前記」には、「何れにしても、私は私の性能に應じて、この機会を善用するほかはない」(六九頁)という覚悟に即して、「戦争のいろいろな場面に於て、今度の事変の全貌をなるだけ正

確につかむことに努力し、予想し得る将来の問題について、自分の判断の基礎となるべき資料を手の届く限り蒐めるやう心掛けた」(七〇頁)という岸田の指針が示れる。さらに、「上海から蘇州まで」では、「九江に於ける各種の調査と、日増しに複雑化して行く街頭の現象」から、「今次の事変の特質と中心」(七一頁)に、「そこそこ、に散在する占領地域の、小部隊を以てする警備と討伐と宣撫工作の実情」(七二頁)が位置づけられる。このような岸田である以上、戦闘自体よりも戦後の文化工作に報告の照準が定められるのは必至である。一方では、戦跡を辿り、生命の危機に瀕した場面も報告されるが、「宣撫」の実演報告(部落の住民たち)についての考察や戦争の意味づけ(「戦争の道義化について」)など、戦場を離れた文化に関する思索や実践的提言に、

岸田の筆は多く割かれていく。

こうした『従軍五十日』を貫く興味は、「日本語学校」において全面的な展開をみる。揚州で日本語学校を見学し、その実情や生徒とのやりとりを報告した後に、「日本語の普及」を「占領地区の重要な課題」と位置づける岸田は、「日本語を通じて日本を知らせるといふ遠大な抱負をもつて進むことが、この際、文化的に見て新支那建設の基礎条件」だという見通しのもと、学校の整備や教員の配置案まで、すぐれて具体的な施策を提案している(一七二・一七三頁)。

ただし、岸田自ら述べた通り、右の提案は日本語の普及を最終目的としたものではなく、日支関係の改善・解決のための一プロセスと位置づけられ、『北支物情』以来の思索は、「戦争の道義化について」・「日本人の力について」で深められていく。

では、『従軍五十日』は発表当時どのように読まれたのか。

まず、広告「岸田國士著『従軍五十日』」(『東京朝日新聞』昭一四・四・三〇)には、次のような文言が読まれる。

淡々たる筆致で書かれた岸田氏の従軍記が、類書を遙かに凌駕し万人に心を惹かれる所以は、視野が広く観察がゆきとどいて、所論がいちいち肯綮に当るからだ。砲煙彈雨下の生死を描いて蕭索たる感慨にさそふ場面もあれば、後方地区の支那民衆の不可解な表情とその向背、治安並に宣撫工作の種々相を活写した炯眼卓抜な箇所もある。わけても、日支兩民族の協調の将来に関する示唆のごときは、何人といへども襟をたゞして聴かざるを得ない一大論策と言はねばならぬ。

(一面)

ここでは、岸田一流の客観的な筆致・観察にくわえ、文化工作、その延長線上にある日支関係などがクローズアップされている。

同時代評をみても、紺九「大波小波 創作欄は低調」(『都新聞』昭一三・一一・二八)で「▼岸田國士の『従軍五十日』は、やはり彼らしく眼のつけどころが違つてゐる」(一面)と着眼点が評価され、阿部知二「文芸時評(2) 渾然たる文学」(『東京朝日新聞』昭一三・一二・一)でも「心ある人々が従軍作家に求めたものも、単なる事実や感情の衝撃の報告でなく、『事実の見聞を一度その思想と人間知識によつて整理して、批判性と指導性をもつた文章』・『文学者の「眼』』(七面)だとして、岸田を顕揚している。もちろん、亀井勝一郎「文芸時評(2) 従軍記一束」(『都新聞』昭一三・一二・二)や木々高太郎「文芸時評(3) 戦争小説と従軍記」(『中外商業新報』昭一三・一二・六)のように、他の

ペン部隊の成果と並べて岸田を評価する時評文もみられるが、他方岸田の特異点を見出す同時代評も散見される。

たとえば、豊島與志雄は「六号雑誌 文学以前」(『知性』昭一四・二)で、『日支事変の現地に従軍した文学者について、吾々が最も期待したのは、物を考へる人間を示してもらひたいことであつた。然るに、最も多く示されたのは単に物を見る人間だつたとは、どうしたことであらうか』と不満を洩らした上で、『かういふ観点から、私の眼にとまつた文学者の文章は、中支に関する岸田國士君のもの、上海に関する横光利一君のもの、北滿移民村に関する大佛次郎君のもの、其他僅かなものに過ぎない』(九四頁)と述べている。また、『岸田國士氏のルポルタージュは従軍文士の中でかね／＼わたしの最も好むところ』だという「新年雑誌評(一) 東方と西方と」(『東京日日新聞』昭一四・一・六)の新居格は、『落着いた描写には全く好感がもてる』として、『戦闘員としての火野氏のルポルタージュ、従軍文士としての岸田氏のものわたしは愛読してゐる』(五面)と、火野と並び称している。ここでは、『戦闘員／＼従軍文士』というカテゴリーが想定されているわけだが、日比野士朗・芹澤光治良・尾崎士郎・今日出海「座談会 戦争の体験と文学」(『文芸』昭一四・七)において今は、戦闘体験の有無をこえて『従軍五十日』の《感動》を吐露しており、日比野も『私も雑誌のとき非常に愛読してをりました』(二五一頁)と肯っている。その今は「真の文化人の従軍記——岸田國士著『従軍五十日』——」(『文学界』昭一四・七)において、同書を貫く『透徹した理知』(一八〇頁)を指摘している。それを具体的に評せば、『戦地にあつて具体的な現象にぶつかる

毎に、筆者は反省し、熟慮している》・《明徹な解釈と鋭敏な批判が渦を巻いて溢れ出る》ということになり、同書を《知識人が知識人の資格に於て従軍した記録として、これ以上でもこれ以下でもない美事な一線を画して、謙虚な従軍作家の使命を果してゐる》(一八一頁)と総括している。

五 まとめと展望

岸田國士の大政翼賛会文化部長就任が報じられるのに前後して、『従軍五十日』は広告「岸田國士著『従軍五十日』」(『東京朝日新聞』昭一五・一〇・二四)で次のように紹介される。

本書の真価は炯眼卓抜な氏が、戦塵の中から最も大胆に対支文化政策の具体案を具体案を掴み出して披瀝した点にある。

本書は上梓以来広く識者に喧伝され、常に問題を提起し來つたことは、氏が此度び要職に就かれたこと、共に、蓋し当然と云へよう。(二面)

ここでは、岸田という人物と『従軍五十日』(の内容)とが、『要職に就くことと直結されている。こうした見方こそ、本稿二三四で検討してきた岸田とその著作に差しむけられた評価の帰結である。その要所は、『氏にあつては東亜の共同体とか新秩序建設とか今や聖戦の目的を簡単に要約したこれ等の言葉は理論でもなければ、合言葉にも似たスローガンでもない』という「真の文化人の従軍記——岸田國士著『従軍五十日』——」(前掲)の今日出海が『現地で新秩序建設をするために、どんな方法なり態度が必要か、その実践的方面を氏の理知は執拗なまでに究明する』(一

八一頁）と指摘した岸田のスタンスに尽きる。《この記録（『従軍五十日』／引用者注）の結論は或はこの従軍の目的とも云へるのだが「戦争の道義化について」といふ章に尽きてゐる」という今は、同文において次のようにその実用性を高く評価していた。

僕は満洲北支の短い旅から帰つて、「従軍五十日」を通読し、戦地区域ではない満洲で、文化事業にたづさはる官吏達に送りたと思ふ。従軍の記録といふよりは、宣撫工作や、共同体論の実践に関する根本的な考察が語られてゐると思ふからである。（一八二頁）

そうである以上、「戦争の道義化について」の検討は必須である。そこに何が書かれているか、以下に検証しておこう。

そこで「日支親善」という言葉をとりあげる岸田は、「これは決して外交辞令的な、政治臭を帯びたスローガンであつてはならぬ」として、「国民と国民との感情的融和を計り、誤解から生ずる相互侮蔑の念を一掃することは、今日、両国の識者が何れも冀求するところ」だとみて、「為政者は、今度の事変の特殊性を考へたなら、対外的宣伝ばかりでなく、より以上国民自体の戒飭に乗り出すべき」（一九六・一九七頁）だといふ。これは、日本の為政者に対する、ともすると批判を含んだ要望で、ここに日本人として戦争を正当化しつつも、支那という視座も手放さない岸田の（同時代の文学者に比して）特異なスタンスは明らかで、これは『北支物情』・『従軍五十日』を通じての成果ともいえる。

さらに、「戦争をあまりに道義化しようとして、これを合理化する一面にいくん手がはぶかれてゐる傾がありはせぬか」と日本の現状を批判的に捉えつつ、次のように論じていく。

主観的な聖戦論は十分に唱へられてゐるが、客観的な日支対立論とその解消策は、わが神聖な武力行使の真の行きつくところでなければならず、寧ろ、これによつてはじめて東亜の黎明が告げ知らされるのだと私は信ずるものである。（二〇二頁）

「主観」を排した「客観」を求めつつも、「神聖」・「東亜の黎明」といった日本にとつての事変の意味づけはその修辭ごと肯定していく——こうした言明こそ、よくいえば岸田一流のバランス感覚であり、あるいは岸田の矛盾・限界とも評されるものである。こうした二面性を保持したまま、「戦争の道義化について」は、先の引用につづく次の一節によつて締め括られる。

いはゆる客観的な対立論とその解消策の第一項目として、私は、日支民族の感情的対立の原因の研究といふことを挙げたいと思ふ。事変そのものを挟んで、両国の運命は等しく重大な転機に臨んでゐるけれども、かゝる根本の問題について、なほよく考慮をめぐらす余裕のあるのは、彼でなくして我である。（二〇二頁）

ここでも岸田は、日本に「余裕」（アドバンテージ）を担保しつつも、両国を対等に捉え（「等しく」）、自己批判的に「我」のなすべき課題を提示している。しかも、ここで岸田が想定し重視しているのは、政治でも軍事でもなく、文化である。そのことは、つづく「日本人の力」において次のように示される。

現在のところ、武力を含んでの政治が総てを支配してゐることは当然であるけれども、この事変の特殊な性質からみて、政治が総てを解決するのではないといふ見透しが、政治家自身

の口吻のなかにもみえてゐるくらゐである。政治以外の国民の力とは何か？ 一口に云へば、為にするとこゝろなき日本人の眞の姿を支那民衆の心に植多つけ、その信賴すべき「人間性」と、彼等と共通の理想を目ざして生きるもの、ある実証を示すことである。(二〇四・二〇五頁)

これこそ、長編小説および『北支物情』・『従軍五十日』といった文学作品とその評価の、同時にそれらを深い思索に基づき書きついだ岸田國士という文学者の、いわば到達点で、別言するならば、ここには昭和一〇年代における岸田國士のエッセンスが凝縮されている。それが、清濁併せもつ危険なエッセンスだとしても、こうした地点からでなくては、昭和一〇年代を生きた岸田國士を考へるための視座など、仮構することすらできないはずである。⁽¹⁸⁾

注

- (1) 「文壇部隊陣中句」(『東京日日新聞』昭一三・一〇・二〇)
五面
- (2) 安田武は『定本戦争文学論』(第三文明社、昭五二)で『岸田の「発言」について見るかぎり、太平洋戦争下といえど、彼は「変節」どころか、「年来の持説」を固持して譲つてはいない』(六八頁)と論じ、渡邊一民は『岸田國士論』(岩波書店、昭五七)で『大政翼賛会』文化部長岸田國士をファシズムに対する『最後の抵抗線』(一八九頁)とみる。他方、古山高麗雄は『岸田國士と私』(新潮社、昭五一)で、『戦争中の岸田國士は、矛盾を抱え込んだままで、その矛盾を取り扱う方向には考へを展開させていない』(二三四頁)と述べ、大笹吉雄も『最後の岸田國士論』(中央公論新社、平二五)で岸田の公職

追放について、『アメリカの言い掛かりだったとも、不当な処分だったとも思わない』(一九三頁)と断じている。

(3) この間の事情については、奥出健「大政翼賛会と文壇——岸田國士の翼賛会文化部長就任をめぐって——」(『国文学研究資料館紀要』昭五六・三)参照。

(4) 今村忠純「岸田國士の戦時下——『生活と文化』と『荒天吉日』と——」(『日本近代文学』昭五一・一〇) 一七八頁。なお、同論には『あたかも事变下の北支の物情が、こうして遠い過去の出来事であるかのとき、一見のどかな歓談の風景とさえみえてとれるのだ。いやそれゆえに、一方ではさらに複雑にくもつた岸田の表情を読みとれることもまた可能である』(一七九頁)という指摘もみられる。

(5) 都筑久義『戦時下の文学』(和泉書院、昭六〇) 六頁

(6) 注(2) 渡邊書 一四六頁

(7) 荒井とみよ『中国戦線はどう描かれたか 従軍記を読む』(岩波書店、平一九) 七九頁

(8) 注(2) 大笹書 一三七頁

(9) 五味湖典嗣「文学・メディア・思想戦——(従軍ペン部隊)の歴史的意義——」(『大妻国文』平二六・三)

(10) この時期、改造社より『岸田國士長篇小説集』も刊行される。刊行順に『第八卷 暖流』(昭一三・一二)、『第二卷 鞭を鳴らす女』(昭一四・一)、『第四卷 都会化粧』(昭一四・二)、『第三卷 愛翼千里／啄木鳥』(昭一四・三)、『第一卷 由利旗江』(昭一四・四)、『第五卷 双面神』(昭一四・五)、『第六卷 牝豹』(昭一四・六)、『第七卷 落葉日記』(昭一四・七)の全八巻である。

(11) はやくは、福田恆存「岸田國士論」(『現代日本文学全集33巻 高與志雄・岸田國士集』筑摩書房、昭三〇)に、『岸田さんに

は「崩壊を避けようとする意識」と「崩壊を急がうとする意識」とが、同時に表裏をなして存在してゐた》(四〇三頁)という指摘がある。

- (12) 「長篇小説評」(4) 岸田國士の「暖流」(『東京朝日新聞』昭一四・一・二二)の小林秀雄も、『田利旗江以来、岸田氏は、同じ仕事を、或は寧ろ同じ質問を執拗に続けてゐる』として、『本當の意味で新しい女性とは?』(七面)という主題を読みとる。

- (13) 拙論「昭和一二年の報告文学言説——尾崎士郎を視座として」(『文芸研究』平二六・三) 参照

- (14) 岸田國士「北支の旅」(『専売』昭一三・三)引用は『岸田國士全集23』岩波書店、平二) 三五五頁

- (15) 拙論「(戦場)の日記——火野葦平「麦と兵隊」」(『立教大学日本文学』平一九・一二) 参照

- (16) 注(2) 渡邊書参照

- (17) 《北支の従軍から戻つてきた岸田氏の作家態度は微妙な変貌を示してゐた》と指摘する「岸田國士論——主として氏の演劇面について——」(『知性』昭一五・八)の石河稷治は、『その心象の変化は作家的矜持の上から多少の矛盾もあつたには違ひないけれども「北支日本色」翌年の漢口行「従軍五十日」に於ける氏の觀察眼はすべてかうした(戦争に対する)引用者注)肯定的な角度の考察の上のみ確立されてゐる』(一八一頁)と批判的な見方をしている。

- (18) 北村日出夫「敗戦の《跨ぎ方》——岸田國士の一九四〇年頃の言説分析——」(『評論・社会科学』平二三・一二)、拙論「戦時下の岸田國士・序説——「荒天吉日」を手がかりに」(『日本近代演劇史研究会編』岸田國士の世界)(翰林書房、平二二) 参照

※「北支物情」・「従軍五十日」本文は、『岸田國士全集23』(岩波書店、平二)・『岸田國士全集24』(岩波書店、平三)による。

※本稿は、科研費・若手研究(B)「文学的言説における日中戦争前期(中国)表象の多角的研究」による研究成果の一部である。

(まつもとかつや 信州大学准教授)